

良貨が悪貨を駆逐する

友 岡 学

目 次

は し が き — 問 題 の 状 況

- 〔1〕 貨幣観念の倒錯ぶり
- 〔2〕 貨幣の時間・空間的構造
- 〔3〕 貨幣についての王党派イデオロギー
- 〔4〕 国際通貨制度と帝国主義
- 〔5〕 良貨が悪貨を駆逐する

む す び

は し が き — 問 題 の 状 況

悪貨は良貨を駆逐する——これは云わずと知れたグレシャムの法則である。もっとも、本当の所、グレシャムじきじきの言葉ではないらしい（望月信『貨幣経済論』1966白桃書房54～55ページ）が、そんなことはここではどうでもよい。ともかく、それが「法則」として広く信じられて一向に怪しまれていないことに問題がある。

何を良貨と云い悪貨と云うのかという点は別として（後で論じなければならぬ）、この「法則」を前にすると、つぎのような素朴な疑問が起ってくる。第一に、どうして悪いものが良いものを駆逐するのか、事柄の筋道としては、むしろ、逆ではないか。第二に、この「法則」が仮に正しいとすれば、それこそ（グレシャム以来経過した年月を思うと）この経済社会にはもう悪貨が充満しているだろうが、そう考えてさしつかえないのか。

昨年8月、ニクソンはこれまで外国の通貨当局にだけ認めていたドルの兌換をも停止すると声明した。ブレトンウッズ体制は、金為替本位制度としての内容をすでに68年3月に失ない、ドル本位制度へ変身していたが、遂にとどめをさされた形である。もっとも、ドル本位制度とはいえ、ドルが一定の金量を表現するとされている限り、精神的にはなお金為替本位制度が続いていると云えるかも知れない。(1) 事実、金への志向はなお強く人々の魂を支配している。わたしは、すでに廃位された王への追憶に生きる共和政時代の王党派をそこに見るような気がする。勿論、追憶にふけるのは各人の自由だが、それが現実的勢力として事態の改善に立ち足る場合には、追憶の根を絶つのが必要となるであろう。わたしがここでグレシャムの法則なるものを取り上げるのは、それが王党派理論であると思うからである。

(1) ドル本位制度については岩野茂道「ドル本位制論について」（熊本商大論集、第34号1971.9）を参照。わたしは「事実上のドル本位制」は「金為替本位制から将来あるべくはずの国際管理

通貨制度にいたる道程上に形成された過渡的自然システム」だとする岩野氏に（「国際管理通貨制度」という文中の用語を「世界管理通貨制度」と改めるという条件で）賛成する。

人々が国際通貨に対していっせいに関心を集めているこの際にこそ、貨幣本質論が新しい事態に即して省みられるべきではないだろうか。昨今の国際通貨論議には、貨幣本質論はすでにとうの昔に済んでしまっているということが暗黙のうちに前提されているようである。今改めて貨幣本質論が取り上げられるとすれば、国内と国際（もしくは世界と国際）という二つの空間の性質が考慮されねばならないだろう。その理由としては、二つが考えられる。第一に、水と油の如く溶け合わないノミナリズムとメタリズムは、この二つの空間の異なった性質と関係がありそうに思われること、第二に、経済的には世界は統合しつつあるのに、政治的には依然として世界は分裂しているという経済と政治のギャップに現代的な国際通貨危機の原因がありそうに思われることである。だから、貨幣本質論は済んでしまったのではなく、むしろ、今からこそ本格的に始められるにふさわしいと云えるのではないだろうか。

わたしはこれまで直接間接に貨幣を論じて来た。（「商品と貨幣——その同伴と対立」 鹿児島県立短大紀要、第15号1964、「貨幣的経済理論批判」経済論究、第17号1965、「物価論反省」長崎大学教育学部社会科学論叢、第18号1969）この風変りな論文に馴染むためにも、それらを参照していただきたいものである。

〔1〕 貨幣観念の倒錯ぶり

貨幣そのものを論ずる前に、貨幣についてのある種の人々の観念がいかに倒錯しているかを示しておきたいと思う。真理はしばしば常識を裏切るけれども、常識を裏切るからといってそれが真理であるわけではない。もっとも、これから紹介するのは、真理と常識との関係というよりは、言葉の使い方の問題であろう。要するに、通常の用語法を守りさえすれば、決して起ることのない倒錯だということである。

（1） 代用品ということ（本物が代用品と云われる怪）

「価値尺度として機能し、したがってまた身みずから、あるいは代理を通じて、流通手段として機能する商品は、貨幣である。」（『資本論』第1巻第3章）もっと端的に「ドルは……金の代用品です。」（芦屋栄之助『金とドル』日経文庫1965、5ページ）

わたしと同世代かそれ以上の人たちは、「代用品」や「代用食」という言葉を聞くと、ほろにがい思いに駆られるだろう。なぜ代用品を使い、代用食を食べねばならなかったのだろうか。本物品や本物食が欠乏していたからである。なぜ欠乏していたのであろうか。戦争によって、本物品や本物食に使われるはずの資源が動員され、そして破壊されたからである。戦時は非常時と云われた。その時期には、今から言えば、わたしたちの精神も異常であった。

この簡単な事例から分るのは、「代用」という現象は異常や非常な状態に対応するということである。「代理」についても同様である。本人が何らかの事情でその役割を果せない状態が発生したときに、本人に代ってその役割を果すよう一時的に当てられた人を代理と云う。要するに、「代用」であれ「代理」であれ、本来、そういうことは起らないのが

望ましい、したがってやむをえず採用され、可及的速やかに廃止されるべき、非常の、一時的な、臨時の、異常の（等々で形容されるにふさわしい）措置である。つまり、間に合わせ、つなぎ、急場しのぎの方便である。これが、「代用」や「代理」という言葉が使われる通常の状況である。

ところで、通貨を金の代用品や代理とある種の人々が云う場合、そういう通常の用法に従っているのであろうか。それがそうではなく、それこそ全く異常なのだ。なぜかと云うと、経済の平常な状態では代用品である（とされる）通貨で用が足り、経済の異常な状態では本物である（とされる）金でなければ用が足りないとされているからである。⁽²⁾ 通常の語法によれば、平常な状態で使われる（代用品とされる）通貨が本物で、異常な状態で使われる（本物とされている）金がその代用品ということになる。そして、恐らく、これが正しいであろう。

- (2) 例えば、マルクスの次の文章を見よ。「世界貨幣は、……富一般の絶対的・社会的な物質化として機能する。……種々の国民間の……均衡が突然に攪乱されるたびに、金銀は本質的に国際的な購買手段として役立つ。」（『資本論』第1巻第3章）

平常あるいは異常な状態という場合、その「状態」には、時間と空間の二様が含意されている。平常な時間は均衡が達成されている時間、異常な時間は均衡が破れている時間、平常な空間は法秩序が確立している空間（有法空間）、異常な空間は法秩序が確立していない空間（無法空間）である。ついでに云えば、有法空間が国内（そして将来は世界）に、無法空間が国際に対応している。

(2) 贋金ということ（真が偽と云われる怪）

「管理通貨制度というのは 贋金 づくりの 制度である。」（今村鴻明「ドル危機の歴史的意味」中央公論1971.10, 76ページ）「正しいゼニ……ニセのゼニ」（本多勝一「円を切上げさせられる側の論理（上）」時代1971.11）

通貨を代用品とするぐらいでは納まらず、ニセものだと言わなければ気がすまない人々まで現われた。地下にもぐっているやも知れない、それこそ本物のニセ金づくり一味にこれを聞かせたいものだ。あの天下の日銀がニセ金をつくっているんだったら、彼らは一体何をつくっていることになるのか。白昼堂々とニセ金をつくるのが許されて、そのニセ金のニセものをつくるのがどうして地下で行なわれねばならないのか。今村氏なら、ニセ金づくりの方は権力もち、ニセ金のニセものづくりの方は権力をもたないからだということで、この疑問に答えるかも知れない。勿論、こんな答はニセの答である。本当の答は、今村氏が云うニセ金づくりがニセのニセ金づくり（真金づくり）であり、今村氏が云う所から導き出されるニセ金のニセものづくりが真のニセ金づくりであるということだ。その証拠に——わたしが現場を押さえたわけではないが——今村氏自身「通貨はニセ金だ」と主張する一文の原稿料として支払われる通貨を、「これはニセ金だ」と云って受け取るのを拒みはしなかったに違いない。今村氏は心にもないことを（心を偽わって）云ったのだ。中央公論社は、支払おうとしている通貨をニセ金だと言っている論文に気付いて、そのニセ金だと言われている通貨を原稿料として支払ったのであろうか。

試みに手当りの辞書を引こう。「にせもの」の項に「偽物、贋物」とい漢字が当てられ、「似せて作ったもの」と説明されている。「真の貨幣とは金である」（今村、同上、76ページ）なら、そのニセものは、当然、「金に似せて作ったもの」、すなわち、金そっくりの

もの、さしづめ金色にメッキするとか、金粉をまぶすとかしかわたしには思いつかないが、ともかく、金と見分け難いものであるだろう。日銀がつくっているのは、金のニセものではなく紙幣その他の通貨である。真のニセ金づくりは、その紙幣そっくりの、日銀製の紙幣とはすぐに識別できないものをつくるのだ。この識別性こそ貨幣の一特徴であった。ニセぶりがすぐに露見するようでは、ニセの存在理由がない。ニセものは、それ自身でニセを名乗ることはないし、たとえ名乗っても、名乗り自体がニセかも知れないのだから、ニセものが世に絶えないのであろう。

(3) 節約ということ(浪費が節約と云われる怪)

しばしば聞くのだが、「代用品」が使われるのは本物(である金)を節約するためだという説明がある。深く考えなければ、ついそうかなと思いついでしまうだろう。幸か不幸か、わたしと同世代及びそれ以上の人たちは、「節約」という言葉を聞いてもある種の感慨をいだく。その言葉がどんな場合に使われるか、わたしたちは身にしみて経験しているはずである。そう云えば、economy も、節約を意味していた。

やはり、手近の辞書を引いて見よう。「むだを省いて切り詰める」という説明がある。むだを省くのであって、必要なものを省くのではない。むだは「役に立たないこと、効果、効用がないこと」と説明されている。要するに、もともと使われなくて済む所に何かのもの(資源)が使われている場合、そのこと(または、そのもの)をむだと云うのである。だから、むだを省くとは、使うべきでない所で使われている資源を使うべき所に転用することになる。

こういう節約の意味が、金を節約して(代用品と云われる)通貨を使うと云われる場合の節約に当てはまるであろうか。あてはまらない。なぜなら、省かれた金は、他の使われるべき所に転用されないまま、中央銀行の地下で眠らされているからである。(J.M. Keynes, *Essays in Persuasion*, 1931, 救仁郷繁訳『説得評論集』ぺりかん社, 1969, 190ページ参照) 地下で眠らせるために地下から掘り出す一連のプロセスが、金ではなく、鉄とか石炭であったら、人々はきっとこれをむだと云うに違いない。

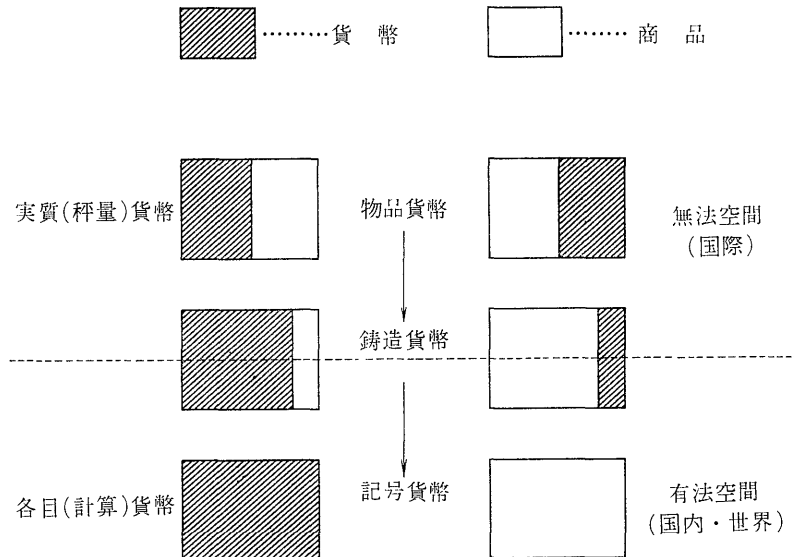
しかし、図らずも、金を節約するという説明自体が、金を貨幣として使うのがむだであることを語っているのは皮肉である。ただ、節約が字義通りに完成されていないのだ。金は貨幣としては省かれたのだが、その本来の用途(工業用としてであれ、装飾用としてであれ)に転用されないままである。そういう意味では、宝の持ち腐れ、浪費が行なわれている。

以上の貨幣観念の倒錯ぶりを見ると、貨幣の良し悪しについての観念も同様であるのではないかと云えそう。つまり、「良貨が悪貨と云われ、悪貨が良貨と云われる怪」ということになる。しかし、先急ぎするのはやめて、貨幣なるものを見ておこう。

〔2〕 貨幣の時間・空間的構造

周知のように、貨幣に関しては、物品貨幣、鑄造貨幣及び信用(または記号)貨幣の三つが区別されている。それらは、歴史的な三段階だと一般に了解されている。そのこと自体には格別異を唱える必要を感じない。わたしがここで強調的に指摘したいのは、従来欠け

ていた貨幣の空間的構造である。空間的構造についての視点が欠けていたために、これまで、「国際」という言葉と「世界」という言葉が無原則に使われ、「国際」と「国内」との空間の異質性がややもすれば見逃されて来た。以上のことに留意して図を描いて見る。



(1) 物品貨幣と云われているのは、一身で商品と貨幣を兼ね備えた財である。しかし、商品としての機能と貨幣としての機能は、交換当事者の立場について見た場合、両立できない。いちばん簡単なのは、いわゆる物々交換 **barter** である。(3) バーターが、現実的にも国際市場で見られることに注意せよ。(4) 財の交換は最初共同体際で行なわれたであろうと云われているが、この共同体際が今日の国際の原型である。

(3) マルクスが、20エルレの亜麻布 = 1 着の上衣を例にした「簡単な価値形態」がこれに当る。マルクスの価値形態には、交換当事者が欠落している。もっとも、等価形態と相対的価値形態との区別に、その影がうつっている。

(4) 今日、アメリカが日本との間の貿易について二国間均衡を求めている思想にもこれが生きてるように思われる。輸出した相手から同額を輸入するという構造は、バーターと同一である。

α という人が財 A (の a 量) をもち、 β という人が財 B (の b 量) をもって交換し合う場合、当事者 α , β について見ると、それぞれの財 A, B の意味は、売りと買いの立場で定まる。

買の立場

1. (α にとっては) A は貨幣であり、B は商品である。
2. (β にとっては) A は商品であり、B は貨幣である。

売りの立場

1. (α にとっては) A は商品であり、B は貨幣である。

2. (β にとっては) Aは貨幣であり, Bは商品である。

このように、交換当事者の立場によって、ひとつ財が、ある時は商品、他の時は貨幣であるので、立場を無視すると、商品と貨幣の区別は消える。売りと買いの観念が一応独立している（商品売るのであって、貨幣売るのではない。貨幣で買うのであって、商品で買うのではない）現在でさえ、バーターを商品と商品との交換だと錯覚する人が絶えない。(5) 貨幣のない交換経済や商品経済など考えつく人々は、こういう錯覚をしているのだ。純粹のバーターがもしあるとすれば、そこでは財の交換が意識されるだけで、売りと買い、商品と貨幣についての観念はそれぞれ独立していないだろう。売りと買いが、「商品売る」「貨幣で買う」というように、商品と貨幣についての観念的区別と並行して観念されるのは明らかである。貨幣のない商品経済というような経済がもしあるとすれば、それは貨幣観念が成立していない経済であろうし、もしそうなら、その時には同様に商品観念も成立していないであろうから、商品経済もないという奇妙なことが起ってしまう。貨幣観念（したがって商品観念）の成立・独立は、ある財がよりしばしば商品としてよりも貨幣として用いられる（したがって、他の財がよりしばしば貨幣としてよりも商品として用いられる）ようになって始まり、鑄造貨幣で一応達成される。

(5) 外国為替市場に関しても同様な錯覚が起りかねない。ドルと円とが交換されて相場が立つ。

この場、貨幣と貨幣が交換されているように見える。ドルと円とを、対等な2国の国内通貨とすれば、2国に共通な通貨はない。2国に共通な通貨こそ貨幣の名にふさわしい。だから、当事者の立場によって、ドル（や円）はある時は商品に、ある時は貨幣の意味をもつのである。

「際」という空間で、バーター乃至バーターの痕跡を残す交換が行なわれるのは、共通する貨幣を成り立たせる信用（を保証する法）が欠けているからである。海賊や山賊が横行するのがむしろ通常の状態——それが経済にとって異常な状態であるのは云うまでもない——である空間に、信用という関係が成立することはない。物品貨幣というのは、一方で貨幣としては商品から独立して行かねばならないのに、他方で商品としての実質を備えていなければならないというジレンマの塊であると云える。前者の要請が金になるまでの物品貨幣の進化を促がし、後者の要請が金を越えさせない限界を設定する。金は、物品貨幣としては最高のものであるが、貨幣として最高であるわけではない。

物品貨幣のジレンマは、譬えて云うなら、一人の人物が泥棒と警官であるようなものだ。その人が泥棒の仕事をする時には警官であっては困るし、警官の仕事をする時には泥棒であっては困る。明治以前には、目明しとか岡っ引きの類は、多かれ少なかれ、**二足のわらじ**を履いていたと云われている。資本主義と呼ばれている社会が成り立つまでは、そういう二足のわらじを履く人物を許すような社会状態であったのである。現在判然と区別されている国内（空間）と国際（空間）とが、一つ空間に重なり合っているような状態である。長い過程の間に、より多く商品としての機能を果す財と、より多く貨幣としての機能を果す財との両極分解が進行する。その最後の段階で、金が専ら貨幣としての役割を果し、他の諸財が専ら商品としての役割を果すようになる。

(2) **鑄造貨幣**は、物品貨幣のジレンマを暫定的に解決するものとして出現した。ある財に、商品とは明確に識別されうる一つの形式が与えられ、貨幣としての機能がそれに固定

されるとき、その財は鑄造貨幣と呼ばれる。形式そのものはひとつの記号である。したがって、鑄造貨幣は記号貨幣の出発点でもある。他方、形式をはがせば、その財は商品としての機能をたちまち回復する。したがって、鑄造貨幣は物品貨幣の終点でもある。そういう意味で、鑄造貨幣は、物品貨幣と記号貨幣とをつなぐ橋である。

ところで、貨幣は価値尺度機能を果すとされているが、これについては、測るものと測られるものとは共通の尺度が必要であるので、商品と貨幣とは、同種の尺度（すなわち価値）をもたねばならぬと云う人々がある。「価値の尺度としての貨幣は決して単なる抽象的な単位ではあり得ない。長さは長さをもって、重さは重さをもって、温度は温度をもって、時間は時間をもってと云うごとく、およそものの尺度はそれが測定せらるべき対象と共通の属性をもたねばならない。……その場合例えば時計が円周をかりて、寒時計が直線の長さをかりて、時間もしくは温度を示すことが時間もしくは温度が時間もしくは温度以外のものを単位として測定せられることを意味しないことは詳言を要しないであろう。」

（新庄博『貨幣論』1962、岩波全書162ページ）この説明は、前半と後半とでは矛盾している。身長と物指は、「長さ」という共通の属性をもつから、身長を物指で測ることができる——これが前半の意味である。この意味からすれば、水と水銀は「温度」という共通の属性をもっているから、水の温度は水銀の温度で測ることができるとしなければならない。だが、後半では、水の温度が水銀の温度そのものによってではなく、水銀柱（寒暖計）の高さによって測られるとしている。水の温度と水銀柱の高さは、いかなる意味でも、共通の属性ではない。とはいえ、わたしは、温度が長さで測れないと云うのではない。温度が長さで測れるからこそ、測られるものと測るものが共通の属性をもたねばならぬことはないのである。この場合について云うと、温度が長さに変換される（温度のそれぞれが長さのそれぞれに一对一に対応する）ことが、異なった属性間の比較を可能ならしめる。

一般的に云うと、商品の価値はベクトルであり、貨幣の価値はスカラーである。マルクス経済学は、価値を（人間的抽象的）労働時間だと、時間次元だけで考える。労働は、なる程、時間的経過なしには行なわれないが、しかし、一定の空間に位置して行なわれねばならないのも、それに劣らず確かなことである。商品の価値は、商品が異なった空間で、したがって異なった時間で生産されているという意味で（労働価値説に立ってさえ）ベクトルという量である。ベクトルは多元的な要素で成り立つ量であるので、相互に直接比較して大小をきめることはできない。大小は、スカラーに変換されてはじめてきまる。⁽⁶⁾だから、貨幣価値は、貨幣の個数そのもの、すなわち数である。

- （6） 変換は、マルクス用語の還元に当る。複雑労働を平均的な単純労働に還元するという場合のそれである。これについて怪しむ人はいないが、わたしがすでに別の所（『経済学への提議（4）』、鹿児島県立短大紀要、第14号、1963、36～37ページ）で指摘したように、平均するには複雑労働が前もって分っていなければならないこと、単純労働が平均労働とも云われているのは、単純労働と複雑労働との中間に平均があるので自己矛盾していること、などの初歩的な誤りがある。

鑄造貨幣は、まさに数えられる貨幣（計算貨幣）として現われた最初のものである。物品貨幣は、貨幣として機能する場合でさえ、ただ数えられることでは済まされなかった。秤量貨幣の「秤量」という言葉は、種々の要素が考慮されることを示しているであろう。

鑄造貨幣において、種々の要素が、ある共通の形式（刻印）の背後に消えるのである。最初、ある空間を支配領域とする最高権威者が素材の品質を保証する刻印を、ある物品貨幣（金や銀）に捺した。人々はその権威を信頼した（あるいは、させられた）。いったん信頼が成立すれば、いちいち品定め（秤量）する手間が省かれる。それこそ節約である。金（や銀）について云えば、地金の純度を確かめる手順は欠かせない。恐らく、権威への信頼は、鑄貨の素材の品質保持という実際政策によって補なわれなければならない程度のものであったろう。しかし、それでも、最初の一步が印されれば、も早後もどりしないだろう。やがて、人々は、貨幣としての鑄貨の通用力は、その素材の品質が約束された水準を割っても、結構刻印された額面価値通りであることを知る。鑄造技術は均質な鑄貨をつくり出す程に発達していなかったし、その上、流通の過程でのひとりでの磨減は避けられない。誰が最初それに気付いたのかもとり知るよしもないが——もし分れば、その人の名は最初のノミナリストとして記念されよう——、やがて、庶民は庶民なりに、支配者は支配者なりに、そのことに気付き、ひっそりと、あるいは公然と、人為的な *swear*（こういう英語が残っている）過程が始まる。こうして、鑄造貨幣において、いわゆる「名目」（額面）価値と「実質」価値のズレが生ずる。この段階で、グレシャムの法則が出て来るのだ。支配者が財政拡張の手段として改鑄する場合、確かに経済はそのために乱れ、庶民は時ならぬ鑄貨洪水に溺れて苦しむ。その限りでは、為政者の悪政を責めることができる。だが、この悪政が、鑄造貨幣を記号貨幣へ押し進めるのに貢献したのだから皮肉なものだ。

鑄造貨幣は、支配者の権威が及ぶ範囲の空間、すなわち威令が行き渡る空間で通用する。「実質」価値と「名目」価値が一致している間は、権威は貨幣の流通に格別影響しない。両価値にズレが生ずる程度において、貨幣の流通は権威に依存する度合が高まる。逆に云えば、法秩序が確立整備され、権威の浸透が均質化すればする程、その空間では、「実質」価値と「名目」価値のズレが大きい鑄貨が流通する。ここから、貨幣国定説が出て来るのである。ある空間が有法化すればする程、その外部の空間は無法化をいっそう目立たせて現われるであろうし、ここには、有法空間におけるとは逆に、「実質」価値と「名目」価値の一致する貨幣、すなわち物品貨幣が流通するであろう。

（3）記号貨幣にいたって、貨幣の「実質」価値と「名目」価値とのズレは決定的になる。紙幣、更には銀行の帳簿上の数字（貨幣）では、「実質」価値はゼロとみなしてもさしつかえない程である。行きつく所は、いわゆるキャッシュレスである。⁽⁷⁾

- （7）「今日の電子記算機は、やがて電話や電灯のように広く普及して手軽に利用できるようになるでしょう。そうすると、このクレジット・カードによる金銭処理が一切電子計算機に乗せられて、紙幣も小切手もいらぬ社会（キャッシュレス・チェックレス・ソサエティー）が実現されることになるでしょう。」（島本融 北海道銀行会長「インタビュー・銀行の未来像」朝日ジャーナル 1968. 1.7, 123ページ）

鑄造貨幣までは、貨幣は何らかの商品性をもち得る素材に宿った。物品貨幣については同一人物が警察官と泥棒を兼ねるという譬をしたが、鑄造貨幣は、ある人物が警察官であることをやめた途端に泥棒になるようなものである。記号貨幣にいたると、もう同一人物

が、どんな場合でも、警察官であったり泥棒であったりすることはない。すなわち、記号貨幣では、貨幣が宿る素材はもう商品性をもつことはない。同一素材に貨幣性と商品性とは、同時的にか異時的にか、とにかく宿ることが可能である間は、貨幣観念と商品観念との分離独立は完成されない。云いかえると、記号貨幣にいたって、両観念の分離独立が完成することは、記号貨幣こそ完成された貨幣、貨幣そのもの、まじり気のない貨幣であることを意味する。

記号貨幣がどんな空間に成立するかは、もう多言を要しないであろう。現代風に云えば、民主主義が普遍化した空間、その隅々にまで万遍なく法秩序が浸透した空間、人々が強制されたものとしてではなく選択したものとして法を受容している空間である。この空間の範囲は、当然、全地球面を掩うものでなければならないであろう。なぜなら、商品性をおびることのない素材に宿る貨幣は、あらゆる商品に対して、無差別に立ち向うからである。記号貨幣においては、貨幣価値は、それが宿る素材の（商品）価値にもはや影響されないのだから、⁽⁸⁾ それ自身に表示されている価格である。（前掲拙稿「物価論反省」25ページ参照）。

- （8） 先程（鑄造貨幣について述べた所で）は、「実質」価値と「名目」価値という言葉を、従来の語法にしたがって用いた。あとで詳しく論ずる所だが、「実質」価値と云われているのは、実の所、貨幣（が宿る）素材の商品価値のことである。だから、貨幣に、「名目」と「実質」の二様の価値があるわけではない。

・ 以上の物品貨幣と記号貨幣、そして両者の中間形態としての鑄造貨幣は、一応時間的な段階系列として理解することができるけれども、空間軸上に並ぶ類型としても理解することができる。先の図を垂直方向で見れば時間軸上の配列、水平方向で見れば空間軸上の配列がそれぞれ見られる。すなわち、物品貨幣は、無法空間としての国際に、記号貨幣は有法空間としての国内に、それぞれ対応して存在する。鑄造貨幣は、その名目（額面）と素材の商品価値とのズレが小さければ小さい程物品貨幣に近く、大きければ大きい程記号貨幣に近いので、両空間にまたがって存在し得る。国際空間、そしてそれに対応する物品貨幣（金）がメタリズムの現実的存在理由である。ノミナリズムは、云うまでもなく、国内空間によって存在理由を与えられる。貨幣の在り方としてどちらが論理的であるかは、二足のわらじを履くのと一足のわらじを履くのとの対比から明瞭である。これを、別の観点から考察しておこう。

〔3〕 貨幣についての王党派イデオロギー

マルクスは、ある所で（『資本論』第1巻第3章）、「金（または銀）は貨幣である」と云っている。これを聞くと、ルイ何世とかが云った「朕は国家なり」が反射的に思い出される。実際、金は貨幣であるという人々は、本意に反するかも知れないが（そのつもりではないかも知れないが）王党派的である。

周知のように、商品と貨幣に共通の属性を見出さなくては気が済まない人々がいる。彼らは、貨幣は商品（の一種）である、ある種の商品が貨幣になると云う。わたしは、これ

を貨幣商品説（商品貨幣説と云ってもよからう）、商品先行説と呼んだ。（前掲「商品と貨幣——その同伴と対立」）ひとまとめに、（商品と貨幣との）**同質説**と云ってもよい。⁽⁹⁾ それに対して、**異質説**があろう。わたしの見解である。異質説では、貨幣に商品が先行して発生することなどないし、貨幣が商品（の一種）であることもない。

(9) 商品先行説と貨幣商品説とを共有するのは主にメタリストであるけれども、ノミナリストの中にも、商品先行説をとる人々がいる。ここでは細かいことは省く。

商品先行説（商品・貨幣の異時発生説）をとるメタリストのなかで、古典派から自らを区別しているメタリスト、あるいは素朴でないと自認しているメタリストは、商品・貨幣の同時消滅説をとる。商品・貨幣が消滅した社会を、彼らは共産主義と呼んでいる。『貨幣のない社会』（林要，大畑書店，1933）という何とも素適な本を、わたしは最近入手した。高尚なメタリストの論法によれば、商品と貨幣は生れる時は別々で、死ぬ時はいっしょである。

ところで、生れる時は別々で、死ぬ時はいっしょというのは、心中や飛行機事故などでしか起らない（それさえも、厳密に成り立つかどうか危い）。滅多にしか起らないことを普遍化するわけにはいかない。普遍的な現象としては、むしろ、生れる時に別々なら、死ぬ時も別々か、死ぬ時にいっしょなら、生れる時もいっしょであるだろう。前の場合には、二者に何らの因縁的な関係はない。例えば任意のA夫とB子がそうである。後の場合には、二者は何らかの因縁的な関係で結ばれる。売り手と買い手、貸し手と借り手、夫と妻、主人と家来、等々がそれである。これらは、高尚なメタリストにお馴染みの弁証法で云う対立である。対立し合う二者は対発生し対消滅する。つまり、同伴である。夫と妻が別々に生れて、かついっしょに死ぬことはありえない。夫と妻は、どんな場合でも、いっしょに生れ、かついっしょに死ぬ。太郎と花子は確かに別々に生れ、かつ別々に死ぬ。しかし、夫太郎と妻花子は、いっしょに生れ、かついっしょに死ぬ。太郎が先に死ねば、その瞬間に花子は妻であることを死に（やめ）、未亡人となる。商品と貨幣も同様である。ついでに云えば、人の発生と、商品・貨幣の発生、人の死滅と商品・貨幣の死滅は対応している。

王党派理論とわたしが云うのは、その見解が、貨幣を王に、商品を臣下に見たてること、貨幣王政を弁護する役割を果たすからである。貨幣という王（位）につくのは、商品金である。金は、あらゆる面で、他のどんな商品よりも貨幣という王位につくのにはふさわしい素質に恵まれていると彼らは云う。この云い方は、何の誰某（さし当り金山金太と云おう）は、あらゆる面で、他のどんな人よりも王位につくのにはふさわしい天性の素質をもっていると、その金山金太王を讃美する仕方と同様である。勿論、彼らは、金山金太が臣下（商品）でありながら王（貨幣）でもあるということを矛盾だと感じない。彼らの理論では、矛盾は愛されはしても、排斥されるべきものではないのだから、人から矛盾を指摘されることはむしろ彼らの誇りでさえある。金山金太以外に王たるにふさわしい人物は皆無なのだから、金山（金太）王朝は永遠である。金山金太がたまたま王としての機能を満足に果しえないとしても、その時は代理（名代）を立てればよい。その名代紙野紙平がたとえ金山金太以上に王の働きを果しても、その紙野紙平の働きはすべて金山金太の功績とされる。

王党派理論の破産は、現実の歴史的過程で美事に証明されている。勿論、今日でさえ王政がないわけではないが、今日の王政の面目は昔日の比ではない。なぜ王党派理論は破産

するのであろうか。それは、すでに明らかにされたように、一人の人物が臣下であるとともに王であるという自己矛盾のせいである。一般的に云えば、一人の人物が、集団のメンバーの一員であるとともに、集団の（メンバーの）代表であるという**代表性ジレンマ**のせいである。「個人主義と集団主義という二つの政治的『様式』を構造的にも哲学的にも総合的に調和させることは、おそらく、現在の発展的段階における人類の最も長期的問題にちがいない。」（ケネスE.ボウルディング「都市と国際システム」マーティン・マイヤーソン編『脱都市時代』鈴木、林他訳、鹿島出版会1970、37ページ）と、K.E.ボウルディングが云う時、彼はわたしの云う**代表性ジレンマ**に関心を寄せているのである。⁽¹⁰⁾ ルソーが探し求めたのもそれであつたらう。しかしながら、ルソーは、個人主義と集団主義の間を動揺している。それで、彼の『社会契約論』は相反する両主義にとってそれぞれ聖典とされるのであろう。（平岡昇「ルソーの思想と作品」中央公論社『世界の名著ルソー』所収33～35ページ参照）

- (10) 直接民主主義と間接民主主義との関係の問題だとも云えよう。直接民主主義が個人主義に、間接民主主義が集団主義に対応する。それぞれの極端な形態が、無政府主義と独裁主義である。この両極端は、正反対であるのに、奇妙なことだが、ある種の人々では一致する。かつての全共闘は、一方で自分たちは他の誰によっても代表されないということで直接民主主義を（反スターリン主義の名で）主張しながら、他方で自分たちは他の誰をも代表しているかのよう（スターリン主義的に）行動した。

ある人——仮に首長胴太と名付けよう——が、その名称は何（王、元首、大統領、会長、社長、委員長、市長、等）であれ、集団を代表する場合、その人首長胴太は相反する二つの人格の持ち主である。一つの人格は、勿論**個人人格**であり、他の人格は**集団人格**である。首長胴太は、個人人格を表現しようとすれば、集団人格の表現を押さえねばならぬし、集団人格を表現しようとすれば、個人人格の表現を押さえねばならぬ。平たく云えば、首長胴太は、よき個人（子に対してよき父、妻に対してよき夫）であろうとすれば、悪しき代表でなければならぬし、良き代表であろうとすれば、悪しき個人でなければならぬ。⁽¹¹⁾ こうも云いかえられよう。首長胴太は、個人の意見を主張すれば、集団の意見を代表できないし、集団の意見を代表すれば、個人の意見は主張できない。したがって、最良の代表は個人人格の喪失者ということになる。こうして、**代表性ジレンマ**を解決する悪しき方法（糊塗する方法）が発明される。首長胴太は神（の如き人）であるとか、神の子であるとか、神意を受けた人であるとかの擬制である。⁽¹²⁾ これが王党派イデオロギーであるのは明らかであろう。

- (11) 安倍亮氏は父能成を評して、「悪しき家父にして正しき公人」と誰かに云ったそうである。

（小林勇「人間を書きたい＜安倍能成＞」文芸春秋1972. 2, 336ページ）

- (12) 天皇制が勿論そうであった。王政でなくても、哲人（プラトン）や聖人（孔子）を統治者に期待するイデオロギーも、似たようなものだ。今日でさえ、時として、そういう見解が現われる。

王党派イデオロギーにとらわれないで、**代表性ジレンマ**を解決するにはどうすればよいのか。二つの面から考えるとよい。集団は持続するという時間の面と、集団は広がりをもつという空間の面である。

まず時間の面。

集団は持続するものである以上、代表は持続的なある期間で任期づけられる。任期の長短によって、代表性ジレンマに緩急の差が生ずる。任期が長い程、君主政的になり、無期限の場合世襲王朝が出現する。任期が短い程、共和政的になり、ゼロになれば代表そのものが消えて無政府主義が出現する。共和政というのは、集団意志を個人意志の専横からいかに防衛するかという問題に対する解答であつたろう。一定の短かい任期で代表者を交替させることで、無政府主義にも世襲王朝主義にも片寄らない中間の状態が保たれる。

空間の面

集団は広がりをもつという場合、その広がりについて、閉鎖されているか開放されているかの違いによって、代表性ジレンマにまた緩急の差が生ずる。⁽¹³⁾ 広がりが閉鎖的であるとは、人々がその集団のメンバーを親として生れつくことだけで集団のメンバーになり、死ぬことだけでメンバーでなくなるということ以外には、メンバーであることもメンバーでないこともあり得ない状態である。どんな人にとっても、生と死は（自殺は別として）選択外の出来事である。したがって、集団の閉鎖性が強いもの程、首長胴太は少ない程度でメンバーを代表することになる。⁽¹⁴⁾ 首長 胴太によって代表されないと感ずる人があっても、その人は死ぬことによる以外には、メンバーでなくなることはできないからである。首長胴太によって自分が代表されると感ずることができるメンバーがその集団の支配者グループであり、自分が代表されると感ずることができないメンバーがその集団の被支配者グループである。⁽¹⁵⁾ これに対して、集団の開放性が強いもの程、首長胴太は多い程度でメンバーを代表することになる。開放性が完全であれば、全メンバーを代表する。彼によって自分が代表されないと感ずる人は、その集団から出ているはずだからである。⁽¹⁶⁾

(13) 集団の閉鎖性と開放性については、マックス・ウェバーに学ぶ所が多い。テンニエスの周知のゲマインシャフトとゲゼルシャフトを対応させることもできる。拙稿「共同体ということ」経済・経営研究、第1号1963を参照されたい。

(14) 脅迫システム threat system (K. E. Boulding, *Beyonde Economics*, Ann Arbor: The University of Michigan Press, 1968) や政治悪 (大熊信行「国家とはなにか一核時代における新たなる問いかけ」潮別冊秋季号 No. 7, 1967.10) などの言葉が生まれる状況がこれである。

(15) 「階級」を当てはめてもよい。イン・ロウとアウト・ロウ、主流派と反主(副)流派等が、それぞれニュアンスの違いはあるにしても、それぞれに対応するであろう。

(16) 誰もがどの集団に対しても出入の機会を無差別の条件で保証されるという出入自在性がビルトインされると、どの集団も「公」のものである。結社や移動、居住等々の自由がこれにふくまれる。

ルソーは、出入自在性に気付きながら、惜しいことに、注意を払わずに通り過ぎた。「グロティウスはさらに、各人はその属する国家を捨てることができ、国外に出ることによって自己の自然的自由と財産とを回復できるとさえ考えている。」(『社会契約論』前提書, 320ページ) 「国家が設立されたならば、同意はそこに居住しているという事実により成立する。領域内に住んでいるということは、主権に服従していることである。」(同, 324ページ)

王権神授説は王党派イデオロギーの典型である。貨幣の王党派イデオロギーは、金権神授説とも呼べる金崇拜に現われている。高尚なメタリストは、拜金主義を喰いながら、みずからも拜金主義に陥っている。金本位論者は、金王位論者の別名である。金は、商品の一種でありながら、すべての種類の商品をいわば代表する役割を担う貨幣であるのだから（それまでは、いろいろな他の種類の商品が代表を交替して来た）、二足のわらじを履いているわけだ。しかも、金が最高の貨幣であるとされるのだから、金王朝が永遠に続くことになる。金が他のどんな商品よりも代表たるにふさわしいのは確かである。それは、聖人や哲人など、私心を他の誰よりも去ることができる人物が王位につくのにもふさわしいのと同様である。しかし、本当に私心を去ることができる人物など、この世に存在するとは思えない。金が生身の商品であることをやめない限り、金は神すなわち貨幣にはなりきれない。なぜなら、貨幣としての金は商品としての金に患わされること必定だからである。これを金貨幣性ジレンマと云ってよいであろう。

〔4〕 国際通貨制度と帝国主義

金本位論者は金王位論者であった。「代用品」で危機が来たから、「やっぱり金だ」と「本物」の金の復位を説く声の一部にはしきりである。民主主義で混乱が生じたので、王政復古を説くようなものだ。混乱は、果して民主主義のせいであろうか。民主主義と関係があるとすれば、混乱は、民主主義自体に原因があるのではなく、民主主義が未完成であることに原因するであろう。国際通貨体制の危機も、「代用品」としての貨幣のせいというよりは、金が完全に「代用」されていない（廃位されていない）ことの故であろう。

金本位論者は、金本位制度の構造がいかに代表性ジレンマに陥った帝国主義的構造であるかに気付かない。マルクス主義者が陥っている自己矛盾の一つがここにある。金という貨幣と他の諸商品との構造自体が帝国主義とパターンを共有するだけではなく、金本位制度が金為替制度とともに、そのものずばりの帝国主義的構造で形成されるのである。

「金為替制度は……事実上金本位制度とともに始まっているといっても、けっしていいすぎではなかった。」（小野朝男『国際通貨制度』ダイヤモンド社、1963、108～109ページ）歴史上最初に金為替制度を採ったのはスコットランドで、1763年以来「スコットランドの通貨制度は、為替を通じてイギリスの金貨と結びつき、事実上金為替制度に移行していた。」

（同、108ページ）アイルランドもまた1804年以来、為替を通じてイギリスの金貨と結びついていた。（同、108ページ）一般的に云えば、「金為替制度は、金不足によって金本位制度の採用に踏み切れないでいた植民地や後進国が、銀本位から金本位に転換する手段であった。」（同、114ページ）要するに、金本位制度は金為替制度と事実上一体であって、その一体ぶりは、宗主国や先進国が金本位、植民地や後進国が金為替本位という帝国主義的ないわば主従の関係であったということだ。

ところで、最近、一部のマルクス経済学者によって、マルクス経済学についての反省が語られている。「マルクス主義者の多くが、……資本主義の危機と崩壊を展望し、ただシニカルな世捨人の皮肉な客観的冷笑的態度とやがて来るべき革命への幻想をもって終始し、新たな国際的な通貨制度や体制などというようなものについてわれわれが具体的な構想をしめし、提案するようなことは、……せつかく崩壊しようとする資本主義を助けるために

配慮し、力のかすものにすぎないものと考えている。」（井汲卓一「通貨体制の歴史的位置とその創造的再建」現代の理論, 1971. 11, 19ページ）そうであれば、（世界）貨幣は金でなければならぬとか、共産主義では貨幣は消滅するとかの幻想も捨てられねばなるまい。「金1オンス=35ドルという関係はドルの金価値を示すものと云うよりはむしろ金のドル価値を示すものと云うべきであった。」（井汲卓一, 長洲一二, 富塚文太郎「通貨体制の原理と新構想の追求」現代の理論, 同号22ページ）と、富塚氏は井汲氏の前掲報告にコメントして云う。それが「マルクス経済学からの逸脱も甚だしい、全く逆である、という批判をかなり広く引き起した」（22ページ）のも当然である。金がドルの尺度ではなく、ドルが金の尺度だと云うのは、金こそが代用品でドルが本物だと云うのと同じことである。これは、資本主義の危機と云うよりは、むしろ、マルクス経済学の危機である。その危機の深さは埋め直しができない程であろう。だが、富塚氏は、金1オンス=35ドルが「金のドル価値を示す」と云う時、マルクス経済学の全体系がその上に聳えている労働価値説を捨てているのを自覚しているのであろうか。それを自覚し、それなりの責任を果さなければ、オポチュニストのレッテルを貼られるのが落ちであろう。（18）

- (16) あえてこんな強い調子の表現をしたのは、マルクス経済学の深部にさかのぼってマルクス経済学の自己矛盾を衝こうと黙々と努めている数少ない研究者（その一人、金子甫氏の『「サーヴィス」という労働は人間と区別されるものを生産しないというマルクスの見解について——『生産的労働』『不生産的労働』という概念の難点』桃山学院大学経済論集, 第12巻第1号1970, 「生産者と生産物の所有者との同一性——マルクスの生産概念の批判」同第12巻第4号, 1971, 「労働力商品論批判——マルクスの生産概念への批判との関連において」同, 第13巻第1号, 1971, 「労働力の販売は労働の譲渡であるというマルクスの見解について——彼の剰余価値説に用いられている『弁証法』」同第13巻第3号1971を紹介しておこう）を念頭におかざるを得ないからである。彼らの研究は自分の胸に錐を立てるような一過程を必ず経ている。そういうのと比べると、例えば大内力氏の「生産力の発展と人間——ゆらぐ経済学の報復」（エコノミスト, 1972新年特大号）は、マルクス経済学の自己崩壊を示すものだが、マルクス経済学者としての大内氏自身はいささかの苦渋も感じていないと云ってさしつかえあるまい。

「金のドル価値」というのは、金（為替）本位制度に代るドル本位制度の成立を表現する。金が貨幣の地位からすべり落ちてもとの一商品にかえり、ドル紙幣が貨幣の地位についたことの宣言である。ドルが、果して貨幣の地位を万全につとめることができるであろうか。金が単なる一商品としての本来の職場に復帰するなら、金（為替）本位制度の帝国主義的構造は解消する。（17）だが、別の新しいジレンマが発生する。人々が**国際流動性ジレンマ**と称しているのがそれである。

- (17) 金は貨幣の地位からすべり落ちながら、自由な売買が制限され、その価格が「公定」されていて、なお商品としての本来の職場に復帰を許されていない。こういう中途半端な状態は、以下説明する国際流動性ジレンマを発生させる原因に由来する。鍵は「国際」という空間の性質にある。

「国際流動性の増大はドルの対外供給増である。ドルの対外供給増は米国の赤字増である。米国の赤字増はドルの国際準備性の弱体化である。ドルの国際準備性の弱体化はドルが支えている国際流動性の減少になる。」（近藤鉄雄「二つの国際通貨制度強化案」エコノミスト1963.

9.24, 15ページ）これが国際流動性ジレンマのメカニズムである。国際流動性ジレンマは、要するに、ドルがアメリカ通貨と国際通貨という二足のわらじを履いていることで、自ずから発生する。二足のわらじは履けないのに、履くのを要請されて（あるいは求めて）いるのだ。一足は、赤字を出さないように編まれている。他の一足は、赤字を出すように編まれている。これも代表性ジレンマの一種である。一方で、ドルはポンドや円などと同様に、一つの国内通貨である。他方で、ドルはドルをもふくむあらゆる国内通貨のいわば代表である。この構造がドル帝国主義と云われるのは、ドルが、アメリカをふくめた各国の全商品に君臨するのに、各国通貨はそれぞれの国の全商品に君臨するにとどまるという差別が制度化されているからである。(18) ついでに云えば、例えば英語が国際語であるという状態も、英語帝国主義と呼ばれるにふさわしく、これもまた代表性ジレンマの一種である**国際対話性ジレンマ**の原因となる。(19)

(18) 「帝国主義」とわたしが云うときは、レーニン主義的な概念とは別のものが意味されている。詳しく述べるいとまがないので、さし当りは拙稿「南北問題解決は国家体制廃棄で」（世連研究, 第31号1969）を参照されたい。

(19) これについて論ずべきことは多いが、貨幣と言語がともにコミュニケーションの手段であり、ともに記号であることを、今は指摘するにとどめる。マルクスもこう云っている。「商品の一般的言語は価格であり、その共通の本質は貨幣である。」（『経済学批判』第2章二C）

国際流動性ジレンマが、国内と国際という二つの異質の空間をそのままにして、一つの世界空間を擬制的につくり上げることと密接に関連があるのは明らかであろう。従来、国内空間と国際空間の異質性は、ほとんど全く考慮されることはなかった。そのために、国際という言葉と世界という言葉は、区別されるが如く区別されないが如く、至極あいまいに使われた。周知のように、マルクスは、彼の経済学を打ち立てるに当って、国家を捨象した。(20) 国家を捨象すれば、当然、国家間すなわち国際商業としての貿易も捨象することになる。そのために、国内は世界と同質的空間だとされている。『資本論』では、その方法に従って、「国際」という言葉はほんの僅かの回数しか使われず、「国際市場」や「国際通貨」という言葉も使われていないのに対して「世界」という言葉がしばしば使われ、「世界市場」「世界貨幣」という周知の言葉が使われている。

(20) 国家を捨象して資本主義を論ずることが出来る（その論じ方は問わないことにして）ということは、実には大変重要な意味をもっているのだが（すなわち、資本主義なるものは国家、勿論閉鎖された国家であるが、国家を存在の条件としないという意味）、不幸にして、このことはマルクス自身によってさえ十分に認識されていなかったように思われる。レーニンに至っては、全く考慮されていない。彼の帝国主義が資本主義の最高の段階であるという所に、それは端的に示されている。前掲拙稿「南北問題解決は国家体制の廃棄で」を参照されたい。

しかしながら、そういうことをマルクスが自覚的に行なったとは思えないし、国内（市場）と世界（市場）の同質性について首尾一貫しているとは思えない。端的に云えば、マルクスが「世界貨幣」と云う場合、それは国内貨幣（現代風に云えば国内通貨）と同質のものではなく、国際貨幣と呼ばれるのがふさわしいものである。彼の云う「世界市場」も、

実は国際市場である。このように、彼は、国際を世界と（混同して）呼んでいる。そして、そのことで、最初に捨象した国家（及びそれとの関連事項）を、知らず知らずに呼び戻しているのである。「世界貨幣（実は国際貨幣——友岡）が国民的貨幣に對立して発展する。」（『経済学批判』第2章2C）「貴金属は国際貨幣（よろしい——友岡）としては、最後にふたたび、交換手段としてのその本源的な機能を——商品交換そのものと同じように、自然発生的な共同体の内部（すなわち国内空間——友岡）においてではなく、異なる諸共同体の接点（すなわち国際空間——友岡）において発生したところの機能を——はたすのである。だから世界貨幣（実は国際貨幣——友岡）としては、貨幣は、その自然発生的な第一形態を取りかえすのである（国際空間では、貨幣は商品体に宿らざるをえない、すなわち物品貨幣が流通せざるをえないのである——友岡）。」（同第2章3C）「種々な国民的流通領域のあいだの商品交換が発展すればするほど、国際的な差額決済のための支払手段としての世界貨幣（実は国際貨幣——友岡）の機能は、ますます発展する（むしろ、先祖帰りである——友岡）。」（同上）マルクスが犯している矛盾は、一方で、国内と世界の同質性を前提しながら、他方で、国内と世界の異質性を（対立の名で）語ることである。しかし、よく考えて見ると、マルクスは、国内と世界の同質性という前提自体のなかに、それらとは全く異質の国際を「金が貨幣である」とすることで、すでにしのび込ませていたのである。

そういうわけだから、帝国主義にはつねに反対を唱える（それは条件反射的ですからある）マルクスは主義者が、かえって帝国主義に鈍感である奇妙なことが起るのも無理はない。マルクス主義が唯一の科学性を主張すること自体が、すでに（ドイツ民族が最高であるとナチズムが主張したのと同様に）帝国主義（と同一のパターン）である。国際流動性ジレンマなどはアメリカの為にする陰謀だと云わんばかりで、ジレンマはアメリカが「節度」を守りさえすれば解消すると云うのも、驚くことなかれ、マルクス主義者である。（三宅義夫『金——現代経済におけるその役割』岩波新書、1970、180、187、190ページを見よ。）警官と泥棒の二足のわらじを履いた人物が警官の仕事をおろそかにするのに対して、節度が足らんと叱るようなものだ。二足のわらじを履いていること自体に節度が欠ける原因がある。貨幣の帝国主義的構造がアメリカをして節度を失わせているのである。帝国主義は帝国主義者の節度の欠如から生ずると云うのがマルクス主義というものであろうか。

国家を捨象して資本主義を論ずるマルクスの方法は特筆に値する貴重な着眼であったが、その方法に含意される閉鎖的国家抜き資本主義の必然性に当の本人が気をとめなかったのだから、彼の垂流が全く気づかなかったのも当然である。国内と世界とが同質の空間であるとすれば、国内に文物のコミュニケーションを遮断する境界がも早ないように、世界の内部にも（現在なお残存しているような）境界（国境）はないのである。国境によって、コミュニケーションが分断されている空間、これが国際である。「人間どうしのあいだの世界人的関連は、本来ただ商品所有者としての彼らの関係にほかならぬ」（『経済学批判』第2章2C）と、マルクスはいみじくも云っているが、国際という空間では、人々は商品所有者として関係する以前に、それぞれの国籍所有者として関係するのを余儀なくされる。「商品は、それ自体、宗教的・政治的・国民的・言語的のあらゆる障壁を超越している」（同上）はずであるけれども、現実的には、国際市場では、それが妨げられて、商品も国籍をもたされる。本来単なる商業であるべきはずのものが「貿易」という形態をとられ

るのも国際市場である。国内市場に貿易という言葉が馴染まないのと全く同じく、世界市場では、「貿易」という形態をとられることなしに、商業が本来の姿で展開するのである。

国家があり、国際があるから、帝国主義がある。帝国主義というのは、国家を単位とする国際的な階級システムと云ってよい。支配的な国家と被支配的な国家とが二重化されて存在するシステムである。金（為替）本位価値は、そういう帝国主義に対応している。国際空間は、そういう帝国主義的構造で成り立つので、金が貨幣の代役を努めねばならないし、そしてまた金があらゆる国家にとって無差別に貨幣としての代役を果すことはないのである。その構造が変らない限り、すなわち国際空間では、たとえ金との交換性を直接的には失ったとしても、金は死亡を宣告されることはないし、通貨はジレンマを伴うことなしには存在できない。云いかえると、国際通貨なるものは、あらゆる国家にとって無差別の働らきをする貨幣であるようには存在できないのである。一国とは限らぬ。二国でも、三国でもよい。とにかく、少数の特定国内通貨が、国際通貨としての地位を占め、他の諸国内通貨を支配する形をとるのが国際通貨体制というものだ。⁽²¹⁾ したがって、あらゆる国内通貨が、みんな対等の資格で、国際通貨としての役割を果すというような構想があるとすれば、それは幻想に過ぎないだろう。⁽²²⁾

(21) 国際言語体制も全く同じパターンの構造をもつ。だから、世界通貨と世界言語の創造は、世界の創造の試金石であると云えるのである。

(22) M・フリードマンの構想がそうではないだろうか。「国際管理通貨はもし完全な変動相場制が実施されるならば、存在する必要はない」（太田稀喜「フリードマン教授に聞く・国際通貨の将来」エコノミスト、1971.10.12、19ページ）と云う所に、それが示されているように思われる。

〔5〕 良貨が悪貨を駆逐する

すでに見たように、グレシャムの「法則」は、鑄貨に関して「発見」されたものだ。何を良貨、何を悪貨と云うのかを、前後の文脈から推測すると、鑄貨の「名目」価値と「実質」価値との一致あるいは不一致が決め手になっているようである。実際に、貨幣は、しばしば名目貨幣と実質貨幣に区別されるし、ノミナリズムとメタリズムが、その区別に対応している。⁽²³⁾ したがって、鑄貨の「名目」価値と「実質」価値を論ずるのは、何も不都合でないように見える。果してそうであろうか。

(23) 用語の整合性を導ぶならば、「名目」と「実質」は対概念であるので、メタリズムはリアリズム realism と云うべきだろう。メタリズムに固執するなら、実質貨幣は金属貨幣と云うべきだろう。しかし、そうなれば、名目貨幣は非金属貨幣ということになって、肝心の「名目」性は消える。貝殻貨幣も石貨幣も非金属貨幣であるからだ。どうでもいいようなことかも知れないが、わたしがこだわるのは、用語の不整合は、しばしば論理の不整合と対応するからである。他の一例。周知の「人間的・抽象的労働」と「有用的・具体的労働」。前者を生かすなら、後者は「動物的・具体的労働」と云うべきだし、後者を生かすなら、前者を「無用的・抽象的労働」とすべきであろう。

周知のように、賃金に関して、「名目」と「実質」の区別がある。もっとも、両者の区別

に重要な意義を見出したケインズは、**money-wage**と**real wage**と云っていて、用語の整合性に忠実でない。ケインズの用語を忠実に翻訳すれば、貨幣賃金、実物賃金となろう。しかし、今時、実物賃金があろうはずもないので、**money-wage**は賃金の名目価値、**real wage**は賃金の実質価値、省略して、名目賃金、実質賃金と翻訳されるのが妥当であろう。

ところで、名目賃金は賃金として支払われた「貨幣の名目価値」、実質賃金は賃金として支払われた「貨幣の実質価値」の謂である。したがって、その意味は、鑄造「貨幣の名目価値」及び鑄造「貨幣の実質価値」と、それぞれ実質的に、それぞれ一致しなければならない。なる程、賃金として支払われた「貨幣の名目価値」と鑄造「貨幣の名目価値」とは、ともに、貨幣の額面価値（価格）のことだから、食い違いはない。だが、賃金として支払われた「貨幣の実質価値」は、いわば貨幣の購買力（その貨幣で買える商品の量）であるのに、鑄造「貨幣の実質価値」には、そのような意味は全く含まれない。

別の観点からも見ておこう。「名目」と「実質」とを字義通りだとして、あるものについて名目と実質にズレがあるのは、俗に「看板に詐りあり」という状態であろう。「羊頭狗肉」という言葉もある。今様に云えば、不当表示である。羊頭が名目で、狗肉が実質である。(24) 甲乙二人の肉商人がいて、甲は「羊頭羊肉」（または「狗頭狗肉」）商法を、乙は「羊頭狗肉」（「狗頭羊肉」はまずあり得ない）商法を採れば、世間はどちらを選ぶであろうか。云うまでもなく前者であろう。一度や二度はだまされても、だまされ続けることはないだろう。すなわち、「羊頭羊肉」（または「狗頭狗肉」）商法によって、「羊頭狗肉」商法は駆逐されるであろう。

(24) すでに紹介した林要『貨幣のない社会』も、羊頭狗肉商法で売り出されている。収められた17編のうち、「貨幣のない社会」というただの1編を除けば、16編は『貨幣のない社会』に何も関係がない。つまり、17分の16の狗肉と17分の1の羊肉を混ぜて、羊肉として売っているわけだ。この頃の牛缶そっくりである。ついでに云えば、「貨幣のない社会」は狗肉でさえなく、夢を食うというバク肉の肉であろう。

ところで、「羊頭狗肉」は悪貨（「貨」は貨幣の貨であるが、幸いなことに、商品や一般に品物を意味する貨物の貨でもある）と云えるようなものではなく、云うならば「悪商法」であり、羊頭羊肉（または狗頭狗肉）は良貨と云えるようなものではなく、云うならば「良商法」である。日本語的な感覚からすれば、ものではなく、ことである。

それでは、字義通りの良貨（良商品）と悪貨（悪商品）は何で区別されるのであろうか。幸いなことに、この頃はいわゆる公害で、財に **goods** と **bads** とが区別されている。羊肉と狗肉とを比べて、羊肉が良貨 **goods**、狗肉が悪貨 **bads** であろうか。そんなことはない。経済学は、例えばバターとマーガリンの間に優秀財と劣等財の区別を見るが、良貨（良財）と悪貨（悪財）の区別を見るわけではない。優秀財と劣等財の区別は、価格と所得の変化に対応する代替関係に基づいていなされる。このことは、良財と悪財とが区別されるとすれば、異なった商品種類の間ではなく、同一種類の商品についてなされることを示すであろう。例えば、バターならバターに良財と悪財（良いバターと悪いバター）がある。勿論、その場合、価格は同一であることが前提されている。この区別は、二様に表現される理由によるであろう。第一は、バターとしての機能（栄養、風味、鮮度、等々様々の要素から成る）に差があるからだという表現である。第二は、人々の選択の度合に差があるか

らだという表現である。すなわち、財の良悪が、それぞれの財の機能の違いで定義されるか、あるいは、それぞれの財を人々が選択する度合で定義されるか、そのどちらであっても違いはない。だから、良財だから選び取られ、悪財だから選び捨てられると云ってもよいし、選び取られるのが良財で、選び捨てられるのが悪財であると云ってもよい。このように、財の良し悪しは、選択の取捨に対応している。そして、良財と悪財との駆逐関係には、名目と実質という要素は何ら影響しない。

以上のことは、商品にだけ限られる事情であろうか。そんなことはない。羊頭狗肉が羊頭羊肉によって駆逐されるのは、商法の良し悪しに対する社会的選択の結果であるが、それは、商人の良し悪しにおける駆逐関係であるとも云える。すなわち、人についても、良（善）人は悪人を駆逐する（悪人よりも社会的に選択される）であろう。貨幣の場合も、例外である理由は何もない。良貨とは貨幣の機能を良く果す貨幣であり、悪貨とは貨幣の機能を良く果さない（悪く果す）貨幣である。また、社会的に選び取られる貨幣が良貨であり、社会的に選び捨てられる貨幣が悪い貨幣である。それでは、すでにおのずから明らかになっていることだが、「名目」とか「実質」とかで意味されているのは何であろうか。

すでに見たように、鑄造貨幣は、二足のわらじを履いている。表は貨幣で、裏は商品である。昼は警官で、夜は泥棒であるようなものだ。貨幣の名目価値とは、その鑄貨の表（額面）価値（価格）である。貨幣の実質価値とは、その鑄貨の裏（商品）価値である。すなわち、貨幣の名目価値こそが貨幣価値そのものであって（同じことの別表現、むしろ余分な表現であって）、「貨幣の実質価値」と云われているのは、貨幣とは別の、貨幣が宿っている素材の「商品価値」に外ならない。同一額面をもちながら、異なる商品価値をもつ素材に宿る二つの鑄貨があるとした場合、より大なる商品価値をもつ素材に宿る鑄貨は他よりも商品としての機能を当然果し得る。それは、同じ価格で商品価値を異にする二財のうち、より大なる価値をもつ財が買われるのと全く同じことである。すなわち、貨幣の職場から引きあげられる（商品の職場に戻される）のは、商品価値のせいであって、これこそが商品の性格であることをメタリスト自身も認めているのである。「商品は絶えず流通界から脱退するが、貨幣は間断なくそこに止まる。商品の引上げた空席を等価値の貨幣片が占拠する。」（Hilffferding, Finanz Kapital, 1923, S.17~18, 林要訳25ページ）だから、簡単に言えば、「悪貨が良貨を駆逐する」ことの内容は、実は、「貨幣らしい貨幣が貨幣らしくない（商品らしい）貨幣を駆逐する」ことである。⁽²⁵⁾ 貨幣らしい貨幣を良貨、貨幣らしくない貨幣を悪貨と呼ぶことこそわたしたちの感覚に合うので、グレシャムの法則で表現されていることは全く反対に、「良貨が悪貨を駆逐する」というのが真実を表現する。これは、法則と云うには余りにも当り前のことである。良い理論が悪い理論を、良い商品が悪い商品を、良い人が悪い人を、一般的に良いもの（こと）が悪いもの（こと）を駆逐するからこそ、「進歩」があるのであろう。

(25) メタリスト新庄博氏は云う。「最悪の鑄貨（実は最良の鑄貨——友岡）が他を評価する貨幣としての立場に立ち、良貨（実は悪貨——友岡）は総てそれに評価せられる商品として（その通り——友岡）として……流通界から身を引く。」（前掲書、77~78ページ）みずから「良貨は……商品」と云いながら、その矛盾に気付かないのだから恐れ入る。子供でも「良い警官は……泥棒」とは云うまい。泥棒性が少ない人物ほど（ゼロであれば最高に結構）警官になる

(である) のがふさわしいし、そして、社^レ会^ハはそれを選択する。ついでに、もう一つの悪例(好例?)を示そう。「商品であれば優良なるものが先に売れ、粗悪なるものが市場に残るが、貨幣の場合には反対となる。何となれば貨幣は悪質であればあるほど財獲得の手段である点よりすれば優良なる貨幣とみられるからである。」(梶原敬三『経済原論講義』税務経理協会1962, 281ページ)

貨幣らしい貨幣というのは、貨幣の機能が、貨幣が宿る素材の商品性に影響されることの(少)ない貨幣である。こういう貨幣は、勿論、商品たりうる素材から離れて自立した貨幣以外にはありえない。それが、云うまでもなく、記号貨幣と云われているものである。したがって、(記号)貨幣価値は、「内在価値」とも云われている素材の商品価値から説明される根拠を失っている(もたない)。貨幣価値は、それ自身が表示している価格であると定義されるのは、そのためである。ただし、これには、貨幣価値が物価から逆に説明されるような状態、すなわち物価の変動という現象が克服されるという条件が必要である。もっとも、物価の変動は、貨幣の機能遂行が何らかの事情で妨げられていることを意味するから、ここでは考慮の外においてもよいであろう。(この点については、前掲拙稿「物価論反省」を参照。)

むすび

価値尺度とか流通手段とか蓄蔵手段とか支払手段とか、貨幣の機能が語られる。わたしは、それらの機能は、すべて、貨幣の価値請求権に基づいていると思う。銀行券が、それを所有する人に対して、当の銀行券を発行している銀行が負う債務であったのと同様に、貨幣は、それを所有する人に対して、貨幣流通圏の社会が負う債務である。ただ銀行券と異なるのは、銀行は銀行券を提示されれば無条件に額面通りの金を渡さねばならないが、貨幣の場合には、債務の返済に同意する人(商品として資産を売りに出している人)に対してのみ、請求権が行使できるという点である。平たく云えば、何を買ってもよいが、売られているものに限るということである。要するに、ここでわたしが云わんとしていることは、社会が信用によって体系づけられていることに、貨幣の存在理由があるということだ。信用は、当然、それに違背するなら、それ相応に処罰されるという法秩序を背景にする。だから、信用空間は有法空間と同じことだと云ってよい。警官と泥棒を譬えに出したのは、有法性と無法性を象徴するためであった。

不幸にして、有法空間としての世界は、数多くの部分的有法空間としての国内によって分断されて、今なお国際という無法空間の姿をとっている。昔にさかのぼればさかのぼる程、「際」空間はありふれたものであるので、それに人々が馴染み過ぎた余りに、際空間にふさわしい貨幣の姿を、貨幣そのものだと、人々は錯覚した。端的に云えば、国際を世界と思い間違っただのである。グレシャムの法則は、泥棒を兼ねる警官を良い警官と云い、泥棒を兼ねない警官を悪い警官と云うに等しく、無法空間を良い空間、有法空間を悪い空間と云うに等しい。

この「むすび」の部分を残して本稿を書き終った後に、(1972.9.6) IMF理事会によって「国際通貨体制の改革」と題する報告書が発表された。日本経済新聞の杉田特派員に

よると「全く異なる通貨哲学が一つの報告の中で語られている」けれども、「行間にドルを基礎にしたブレトンウッズ体制から一国の通貨を基礎にしないSDR（IMFの特別引き出し権）体制的な方向をめざそうと努力した跡がにじみ出ている。」（日本経済新聞1972.9.8）現行制度に関しては、アメリカ、西欧諸国（特にフランス）及び日本の三者は、三すくみに連衡合従しているが、共通するのはナショナリズムである。アメリカと日本は西欧が求める金価格引き上げに反対することで一致し、日本と西欧は、黒字国の責任を問うアメリカに対して赤字国の責任を問うことで一致し、アメリカと西欧は日本に自由化を迫ることで一致する。ここで問題にしたいのは、アメリカと西欧（特にフランス）で基本的に異なる貨幣哲学である。

アメリカは金の廃位を主張し、フランスは金の復位を主張する。ノミナリズムとメタリズムの対立である。しかし、それぞれの主張は、理論的であるより以前に、強くナショナリズムに影響されている。卒直に言えば、「どっちもどっち」ということだ。アメリカのノミナリズム的な主張の背後には、金の大量流出という事情もさることながら、ドル支配の帝国主義的な通貨体制への渴望がある。フランスのメタリズム的な主張の背後には、ドル支配の忌避（反ドル帝国主義）に代る金帝国主義再建への渴望がある。このフランスの主張に最も喜ぶのは、わたしの言葉で云う内部植民地をもつ帝国主義国南アフリカ共和国である。（日本経済新聞1972.9.8によると南アのドードリックス蔵相は上記報告を論評して、同報告が主要な準備資産としての金の役割を認めていることを評価するとともに、公定価格の引き上げに反対している諸国をきびしく批判した。）ドルであるにせよ、金であるにせよ、国際通貨体制そのものが帝国主義的に成立することは避けられない。

こういう風に、各国がナショナリズムで衝突している現状のもとでは、国際（通貨体制）の世界（通貨体制）への転換は、しきりに話題を提供している多国籍企業の脱国籍をめざした活躍によって用意されると期待せざるをえないであろう。政治（政府）が国家にしばられている時に、経済（企業）は国家を越えて行くだらう。そして、国境を融解するだろう。「『商品』（もの）と『資本』（かね）の“超国籍、化をめざす多国籍企業がさらに大きく飛躍するための外的な“基礎的条件、はととのいつつある。“コスモポリタン・エンタプライズ、（超国籍世界企業）の演出で世界経済は新しい局面、産業ルネサンス、ともいえるところにきているのだ。」（日本経済新聞1972.2.2「世界企業の新戦略＜24＞」。なお、その＜5＞72.1.14、＜22＞72.1.31もあわせて参照されたい。）社会主義は、不幸にして（わたしには、むしろ当然に思える）、国家止揚という共産主義を裏切って、世間の評判とは全く反対に、反共産主義に堕してしまった。社会主義は、世界通貨の創造という未踏の事業に何ひとつ貢献しなかったし、現在もしていない。

少々八つ当たり気味だったかも知れない。わたしは、世界通貨の創造が困難であることを理由に、それは今の問題にはならないとして、対症療法的な戦術をあれこれ論じる雰囲気はたまらなく嫌なのだ。小手先の治療をしているうちに、取り返しがつかない通貨混乱が生じ、1930年代の不幸が訪れはしないかを、わたしはいちばん恐れている。ケインズが説きはじめた頃は、それを迎え入れる諸条件が整っていなかったと、気楽に云えるようになりたいものである。世界通貨が創造されない限り、どんな形をもってしても、通貨上の諸困難は解消することはないということが、もっともっと、大胆に主張されねばならない

と、わたしは心から思う。

世界通貨の創造への道に立ちだかるもろもろの妖怪のひとつがグレシャムの法則である。メタリズムにしろ、ナショナリズムにしろ、グレシャムの法則に潜む思想とともに、帝国主義という同根のイデオロギーから派生している。だから、一を退治することは、他を退治することにつながる。(1972.9.11)